

湖西市制40周年記念企画展

東海道中栗毛彌次馬 新井 歌川芳幾 画



東海道中栗毛(部分)
十返舎一九 作画



東海道中栗毛彌次馬 白須賀 歌川芳幾 画

《解説資料》



東海道中栗毛彌次馬 舞坂 歌川芳幾 画

旅

— 弥次さん 喜多さんの旅を中心に —

十返舎

一九



新居関所史料館

2012.10.

旅へのいざない

旅はまだ見ぬ世界への入口です。江戸時代後期を生きた人々にとってもそれは同じでした。この時代旅は一生に一度の行事とはいえ、一般庶民にとって身近なものとなりつつありました。神社仏閣への参詣を名目として、単独あるいは仲間同士で繰り出すようになります。

この時期は『名所図会』や『道中記』などといった各地の名所旧跡を扱うガイド本が次々出版され、快適な旅を送る環境も整い、人々の旅への夢を掻き立てました。同じころ、旅を題材にした十返舎一九作・画の滑稽本『東海道中膝栗毛』が大好評を博します。『膝栗毛』には古来より続く信仰の対象として真摯に旅に赴くのと対照的な、底抜けの明るさと滑稽さ、しかし憎めない主人公、弥次さん喜多さんのいきいきとした姿を見ることができます。

それでは弥次さん喜多さんの旅を中心に、当時の資料をもとに江戸時代の旅をたどってみましょう。



『東海道風景図会』 歌川廣重画 嘉永2年(1849)

■ 旅立ち

旅の目的

一口に旅と言っても、武家の公用、参詣や巡礼、商業目的など、それぞれ目的があります。そして自分の肩書きに合った服装をし、一目でその人の身分や旅の目的を知ることができました。歌川廣重画『東海道風景図会』にはそうしたさまざまな身分や旅目的による装束が、分かりやすくまとめて紹介されています。

お伊勢参り

寺社参詣は旅の大きな目的のひとつでしたが、その代表的なものにお伊勢参りがあります。弥次さん喜多さんの2人も日永の追分（四日市宿の先）で東海道と別れ、伊勢へと進路を変えています。お伊勢参りは誰もが一生に一度はと願った旅でした。

江戸時代をとおして、「おかげ参り」と称する伊勢参詣が行われました。中でも約60年ごとに起った大規模な4回のおかげ参りは、全国で200～300万人もの人々が一路伊勢神宮を目指したといわれます。

おかげ参りに発った旅人の多くは出発の手続きをせず、主人や親などの許可も得ず、往来手形、関所手形すら持たない「抜け参り」でした。旅費も持たず、街道の沿道において施しを受けました。この行為は施す側にとっても参詣する旅人への接待を意味し、功德を積んだと理解されたのです。4回目となった文政13年（1830）の大参詣では、旅人が手に持った柄杓へ施しをしてもらったことが大きな特徴でした。また関所では手形を所持しない女性であっても、特に抜け参りの通行は黙認されたといえます。それは関所に限らず、信仰の名のもと渡河や渡海、宿泊などさまざまな場面で保護優遇されました。



『旅行用心集』
八隅蘆庵著 文化7年（1810）

旅仕度

徒歩での旅が大半であった江戸時代、持ち歩く荷物は小さくまとめられ、しかも使い勝手良く工夫がされていました。これには携帯用の文具や小銭入れ、枕や雨笠などが挙げられます。さらに旅の途上で役立つ、注意すべき事柄や大切な事象を集めた『旅行用心集』や『定宿帳』を手にししました。

『旅行用心集』の内容は所持すべき品、宿場間の距離や馬の運賃、関所の位置はもちろんのこと、季節場所ごとの日・月の出入りや潮の干満時刻、船や駕籠の酔い止め方法、疲れの取り方、各地の温泉・湯治場、山中で狐、狸、猪、狼などの獣、蝮や毒虫を防ぐ方法、有用な薬草など多岐にわたっていました。

用意が整い、仲間と出立の日を約束し、ここかしこから餞別を受け取り、いざ旅立ちのときには、親族友人が町のはずれまで送り酒宴を催して旅の心得を説きました。

旅の難所 山・川・関所

旅の行程にはいくつもの難所が待ち受けていました。東海道で有名なものとしては、「箱根八里」で知られる箱根峠の山越え、そして「越すに越されぬ」と詠われた大井川の川渡しが挙げられます。

また、街道には自然の地形を利用して作った難所、すなわち関所があります。東海道には箱根と今切（新居）の2ヶ所の関所が置かれ、往来する旅人と武器の厳しい監視を行いました。関所の通過には手形が必要となり、事前に取得しておかねばなりませんでした。

■ ガイド本あれこれ

〔名所図会〕

江戸時代半ば以降、各地の名所旧跡や神社仏閣などを読みやすい説明文と精密な絵で紹介したガイド本、『名所図会』が続々登場して人々の人気を集めました。人々は、旅を前にこのような本から予備知識を得て、期待に胸膨らませ出発したのでしょう。

ここでは数多い名所図会の中から、弥次さん喜多さんの旅路と関係のある1種をご紹介します。

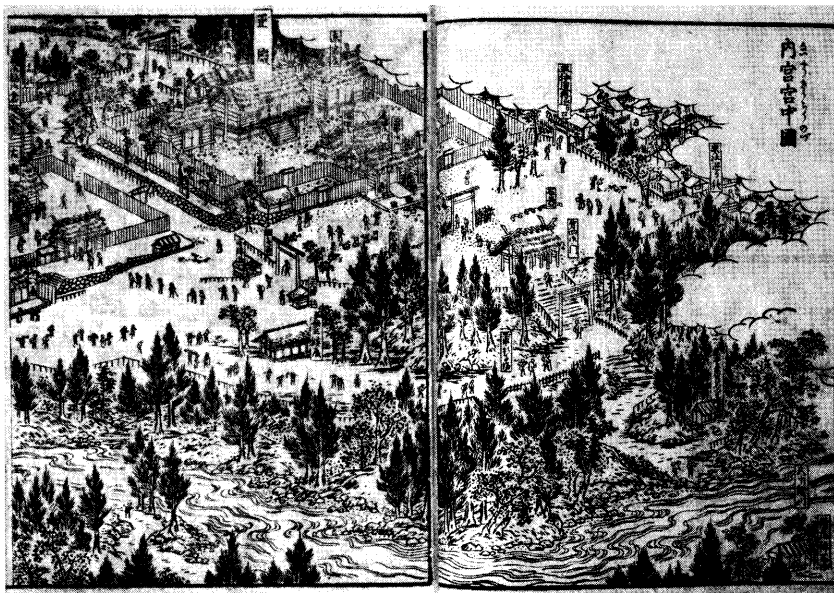
『伊勢参宮名所図会』（右図）

5巻6冊・附録1巻2冊

編者未詳／蔀閑月画

寛政9年（1797）刊

京の三条大橋を出発し、近江国から鈴鹿を越え東海道と離れて伊勢国へ入り、伊勢神宮を目指すまでの情景を描きます。名の示すとおり、最終目的地である伊勢神宮外宮・内宮は特に詳しく、その壮麗な境内の趣が描かれています。



〔定宿帳〕



（左）浪花講定宿帳

（右）浪花講看板

（複製 新居宿旅籠紀伊国屋資料館蔵）

一般庶民の旅に出る機会が増えるに従って、強引に客引きをする、1人旅の宿泊を断るなど、次第に旅籠屋とのトラブルも増えるようになりました。そのため旅籠屋側は、旅人が安全に宿泊できるよう「講」に加盟しました。「講」は現在の旅館組合とも呼べる存在です。

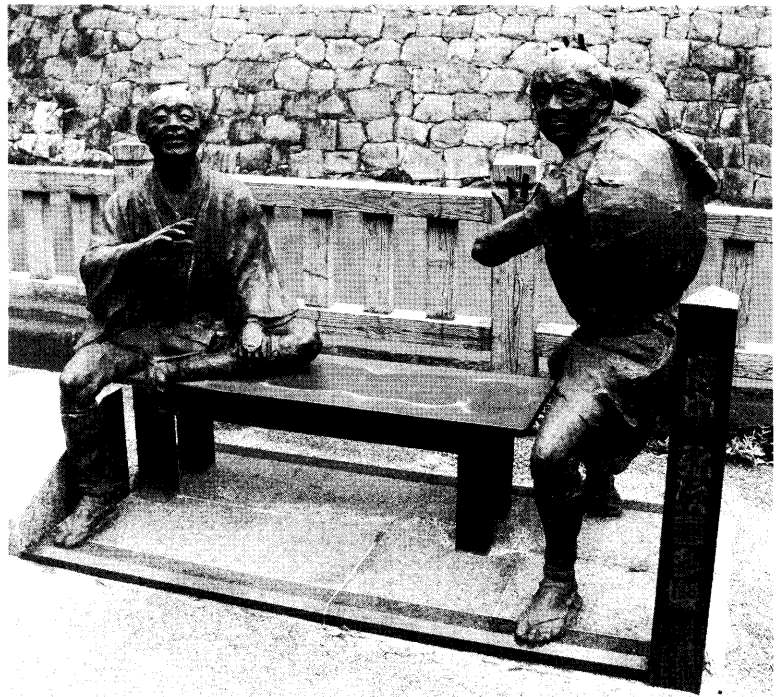
これに伴い、例えば『浪花講定宿帳』といった、講に所属する旅籠だけを宿場ごとに紹介し、携帯にも便利な大きさの宿帳も発行されました。旅籠は自らの参加する講の看板を店先へ掲げ、旅人の方でも鑑札を提示することで、安心して宿泊ができました。

〔道中記／巡覧記など〕

『道中記』は街道各地の案内本、ほか伊勢や奈良、京といった街全体が名所のようなところに限った案内本も出ていました。これは市街地域を区切って、その中に点在する寺社名所を地図で表したり、寺社間の距離からどの順で巡れば良いかまで説くなど趣向を凝らしたものもあり、現在の旅行本のさきがけとなる存在です。形は冊子や一枚刷などさまざまですが、一様に『名所図会』よりも小版で、実際に携帯に便利よう工夫されていました。

『東海道中膝栗毛』の世界

『東海道中膝栗毛』の名で知られるこの作品は、江戸時代後期の戯作者 十返舎一九（1765～1831）によって創作されました。題目「膝栗毛」とは自分の膝を栗毛の馬の代わりにする、つまり徒歩を意味しています。言わずと知れた弥次さん喜多さんの2人が繰り広げる珍道中の物語です。彼らは架空の人物ですが、弥次は著者一九と同じ府中（現静岡市）、喜多も江尻（現静岡市清水）の出身と設定されています。



弥次郎兵衛と喜多八像（静岡市葵区駿府公園）

あらすじ

江戸下町の神田八丁堀で長屋住まいをする弥次郎兵衛とその居候喜多八は、2

人揃って旅に出る算段を企てます。目指すはお伊勢参り、大和（奈良）めぐり、花の都（京都）、梅の花咲く浪花（大坂）。

家財を売り払って得た金を路銀に江戸を発って東海道を西へ向かい、目的の伊勢神宮に参拝し京都見物を果たし、最後に大坂へ到着します。そしてお決まりの一騒動を巻き起こし、大坂を発つところで終幕となります。

物語は弥次さん喜多さんの掛け合いや、出会う人たちとの受け答えといった会話を中心に進められ、各地で失敗を繰り返しつつも人情に触れながら、至るところに散りばめられた狂歌や洒落も物語に華を添えます。

旅中2人の巻き起こす失敗談や騒動もこの作品の面白さのひとつです。次にいくつかご紹介します。

2人の失敗談

◎小田原の宿にて 上方で流行る五右衛門風呂の入りがわからず、弥次は底に沈める底板を蓋と間違え取ってしまい、便所から下駄を持って来て無理やり入る。喜多も入るが釜の底が熱いため、下駄で底を踏み散らしているうち、踏み抜いてしまう。

◎三島の宿にて 弥次は夜半布団の中で昼間に買ったすっぽんに指をかまれ大騒ぎ、挙句道中で一緒になった男に有り金すべて持ち逃げされた。

◎丸子にて 名物とろろ汁の店に入るが、店主の夫婦げんかに遭い、食べ損ねる。

◎浜松の宿にて（次頁図）幽霊話を聞いた夜半、怖いので部屋の雨戸を開けて小用を済ませようとするが、宿の女中が取り込み忘れて干したままだった白襦袢を、幽霊と間違える。

❶先に
外で白いものを
見つけた喜多は
「きやつ」と言つて
倒れる。

喜多八
どうした
所か
あれを
見ねえ

❷弥次も
震えながら
「どれどれ」と雨戸の
外をのぞき「きやつ」
と言つて
倒れた。

喜多八
コリヤ弥次さん
どうした
オオイ
弥次さん
ヤアイ

ゆうれいと
おもひの外に

せんだくの

じゅばんののりが

こわくおぼへた

❸騒ぎに
宿の亭主が
駆けつける。さまざま
介抱しようやく
弥次は気が
ついた。

宿の亭主
ヤレどう
なさいました
イヤあれは
襦袢で
おざります

弥次
エエ
いまいましい
大いにきもを
ひやした



◎舞坂・新居間 今切渡船の渡し舟に乗り合せた男の持ち物だった蛇がいなくなったことで男と喧嘩になる。再び逃げた蛇を喜多が自分の脇差に絡ませ舟外へ放り投げるが、水に浮く脇差を見て、偽物だったことがばれる。

◎宮（熱田）の宿にて 夜、隣部屋の女性のところに忍び込んだ弥次を、女性が盗人と間違え大騒ぎ。

◎伊勢街道にて 弥次は乗った駕籠が他の講の人たちと紛れてしまい迷子になる。あちこち訪ね歩いてやっとのことで喜多のいる宿にたどり着いた。

◎大坂にて 拾った「とみくじ」を当たりくじと思い込み、前祝いの豪遊。ところが翌日金を受け取りに行くと、くじ番が違っていることがわかり一銭ももらえなかった。そのうち前日の請求が来る。事情を知った宿の主人の寛大なとりなしで事なきを得、大坂見物をさせてもらったうえ、着物や路銀まで世話になり大坂を発つ。ここで終幕。

十返舎一九の素顔

『膝栗毛』の成功によって一九は原稿料のみで生活できる初めての戯作者（作家）となった、といわれます。彼は執筆にあたって、実際に取材を行っていることが同時代の記録に残っています。作品中では滑稽さや洒落っ気を強調しながら、その実は綿密な取材で得た確かな情報によって裏打ちされていたのです。

十返舎一九こと重田七郎貞一^{さだかず}の来歴については分かっていない部分が多いといえます。明和2年（1765）駿府町奉行同心、重田與八郎鞭助の長男として駿府城下両替町（現在の静岡県葵区両替町）に生を受けました。

幼名を市九と名乗ったことは、後の筆名「一九」に繋がったとされます。はじめ浄瑠璃作家を志し大坂へ向かいましたが、その後江戸へ移りました。戯作者としての成果は滑稽本に止まらず、読本や人情本、往来物、料理本などにも及びました。また絵師としても才能を発揮し、『膝栗毛』挿絵はもちろん、多くの作品を残しています。

天保2年（1831）江戸にて67歳で没。墓は浅草東陽院（現在は東京都中央区勝どきへ移転）にあります。



十返舎一九生家跡伝承地

本書は、平成24年10月24日(木)～11月25日(日)開催の企画展「旅—弥次さん喜多さんの旅を中心に—」の解説書です。

○表紙写真 ※文中も含め、掲載資料は注記のあるものを除き全て当館蔵。

- ・歌川芳幾画 東海道中栗毛弥次馬 新井（部分）、同 白須賀（部分）
- ・十返舎一九作画『東海道中膝栗毛』挿絵（部分）

○主な引用・参考文献

- ・古文調現代訳『弥次さん、喜多さんの東海道中膝栗毛』第1部～第3部 平野日出雄訳 静岡出版 平成6～7年
- ・新編日本古典文学全集 81『東海道中膝栗毛』中村幸彦校注 小学館 平成7年
- ・「江戸時代の名所案内『名所図会』展」豊橋市二川宿本陣資料館 平成7年
- ・特別展「弥次さん喜多さん旅をする—旅人100人に聞く江戸時代の旅—」大田区立郷土博物館 平成9年
- ・日本の作家 35『十返舎一九 笑いの戯作者』棚橋正博著 新典社 平成11年

湖西市制40周年記念企画展

旅—弥次さん喜多さんの旅を中心に—

発行 新居関所史料館

平成24年10月

旅 — 弥次さん喜多さんの旅を中心に — 展示資料一覧

	資料名	作者など	年代	備考
旅へのいざない	道中風俗(『東海道風景図会』より)	歌川廣重画	嘉永2年(1849)	写真パネル
	道中風俗其二(同)	〃	〃	〃
	弥次郎兵衛・喜多八(『東海道中膝栗毛』より)	十返舎一九画	享和2年(1802)～文化11年(1814)	〃
	諸国道中絵図		文政3年(1820)、地図は享和元年(1801)改	
	東海道分間絵図		宝暦2年(1752)	
	浮世道中膝栗毛滑稽双六	歌川廣重画	安政2年(1855)	
旅立ち				
旅行用心集				
	旅行用心集	八隅蘆庵著	文化7年(1810)	附写真パネル4枚
旅道具				
	東海道五拾三次之内 日本橋(「保永堂版東海道」)	歌川廣重画	天保4年(1833)頃	
	銭刀			
	胴乱			
	早道			
	財布			
	矢立(携帯用文具)			
	煙草入れ			
	火打ち道具			
	弁当箱			
	道中水呑			
	小田原提灯			
	磁石			
	枕			
	町人の旅姿人形			
	振分荷物(旅姿人形)			
	笠(同)			
	手甲(同)			
	脚絆(同)			
お伊勢参り				
	おかげ参りの旗		江戸時代	
旅の難所				
	東海道五拾三次 舞坂(「狂歌入東海道」)	歌川廣重画	天保11年(1840)頃	
	大井川			
	富士山(『東海道名所図会』より)	秋里籬島編／竹原春泉斎画	寛政9年(1797)	写真パネル
	五十三次名所図会十一 はこね(「堅絵東海道」)	歌川廣重画	安政2年(1855)	〃
	往来手形(濃州各務郡小佐野村伝左衛門の巡拝のため)		享和2年(1802)	
	今切関所(『東海道中膝栗毛』より)	十返舎一九画	享和2年(1802)～文化11年(1814)	写真パネル
	川渡り(『東海道風景図会』より)	歌川廣重画	嘉永2年(1849)	
ガイド本あれこれ				
	伊勢参宮名所図会 一～五	編者未詳／蒔関月画	寛政9年(1797)	6冊組
	ならめいしよずえ			
	伊勢参宮細見大全		明和3年(1766)	
	東海道巡覧記		宝暦5年(1755)	
	細見道中記		安政2年(1855)	
	早見道中記			
	汐見坂(『東海道中膝栗毛』より)	十返舎一九画	享和2年(1802)～文化11年(1814)	写真パネル
	いせ大和まいり名所絵図道のり		安永6年(1777)、嘉永2年(1849)改	
	京都巡覧記		天保年間(1830～44)	
	京案内道志るべ		文政12年(1829)	
	京五条橋(『東海道中膝栗毛』より)	十返舎一九画	享和2年(1802)～文化11年(1814)	写真パネル
	旅籠屋の弥次喜多(『東海道中膝栗毛』より)	〃	〃	〃
	浪花講看板(新居宿旅籠紀伊国屋資料館)	複製		〃
	浪花講定宿帳			〃
	栄世講			
	一新講看板※	複製		

十返舎一九の素顔

十返舎一九生家跡伝承地(静岡市葵区両替町)	写真パネル
十返舎一九自画賛	十返舎一九筆

東海道中膝栗毛の世界

府中弥次喜多像(静岡市葵区駿府公園)		写真パネル
小田原での失敗(『初編』より)	十返舎一九画	〃
旅の道筋		パネル
東海道中膝栗毛 発端	十返舎一九作画	文化11年(1814)
東海道中膝栗毛 初編	〃	享和2年(1802)
東海道中膝栗毛 二編上	〃	享和3年(1803)
東海道中膝栗毛 二編下	〃	〃
東海道中膝栗毛 三編上	〃	文化元年(1804)
東海道中膝栗毛 三編下	〃	〃
東海道中膝栗毛 四編上	〃	文化2年(1805)
東海道中膝栗毛 四編下	〃	〃
東海道中膝栗毛 五編上	〃	文化3年(1806)
東海道中膝栗毛 五編下	〃	〃
東海道中膝栗毛 五編追加全	〃	〃
東海道中膝栗毛 六編上	〃	文化4年(1807)
東海道中膝栗毛 六編下	〃	〃
東海道中膝栗毛 七編上	〃	文化5年(1808)
東海道中膝栗毛 七編下	〃	〃
東海道中膝栗毛 八編上	〃	文化6年(1809)
東海道中膝栗毛 八編中	〃	〃
東海道中膝栗毛 八編下	〃	〃
島田宿川会所(国指定史跡、管理者・島田市)		写真パネル
とみくじ	江戸時代	

弥次喜多のその後

東海道中栗毛弥次馬	仮名垣魯文著／歌川芳幾画	万延元年(1860)	
東海道中栗毛弥次馬 発端・住家	〃	〃	
東海道中栗毛弥次馬 箱根・三島	〃	〃	
東海道中栗毛弥次馬 沼津・原の驛	〃	〃	
東海道中栗毛弥次馬 由井・興津	〃	〃	
東海道中栗毛弥次馬 江尻・府中	〃	〃	
東海道中栗毛弥次馬 藤枝・嶋田	〃	〃	
東海道中栗毛弥次馬 掛川・袋井	〃	〃	
東海道中栗毛弥次馬 見附・濱松	〃	〃	
東海道中栗毛弥次馬 舞坂・新井	〃	〃	
東海道中栗毛弥次馬 白須賀・二多川	〃	〃	
東海道名所膝栗毛画帖 前・後編	為信画	明治時代	2冊組
増補東海道膝栗毛 初編～七編	豹々山人著／一魁斎芳年画	慶応2年(1866)～明治3年(1870)	7冊組

※は新居宿旅籠紀伊国屋資料館蔵、その他は全て当館蔵。

この資料は、平成24年10月24日(水)～11月25日(日)
新居関所史料館で開催する企画展「旅－弥次さん喜多さんの旅を中心に－」の展示資料一覧です。